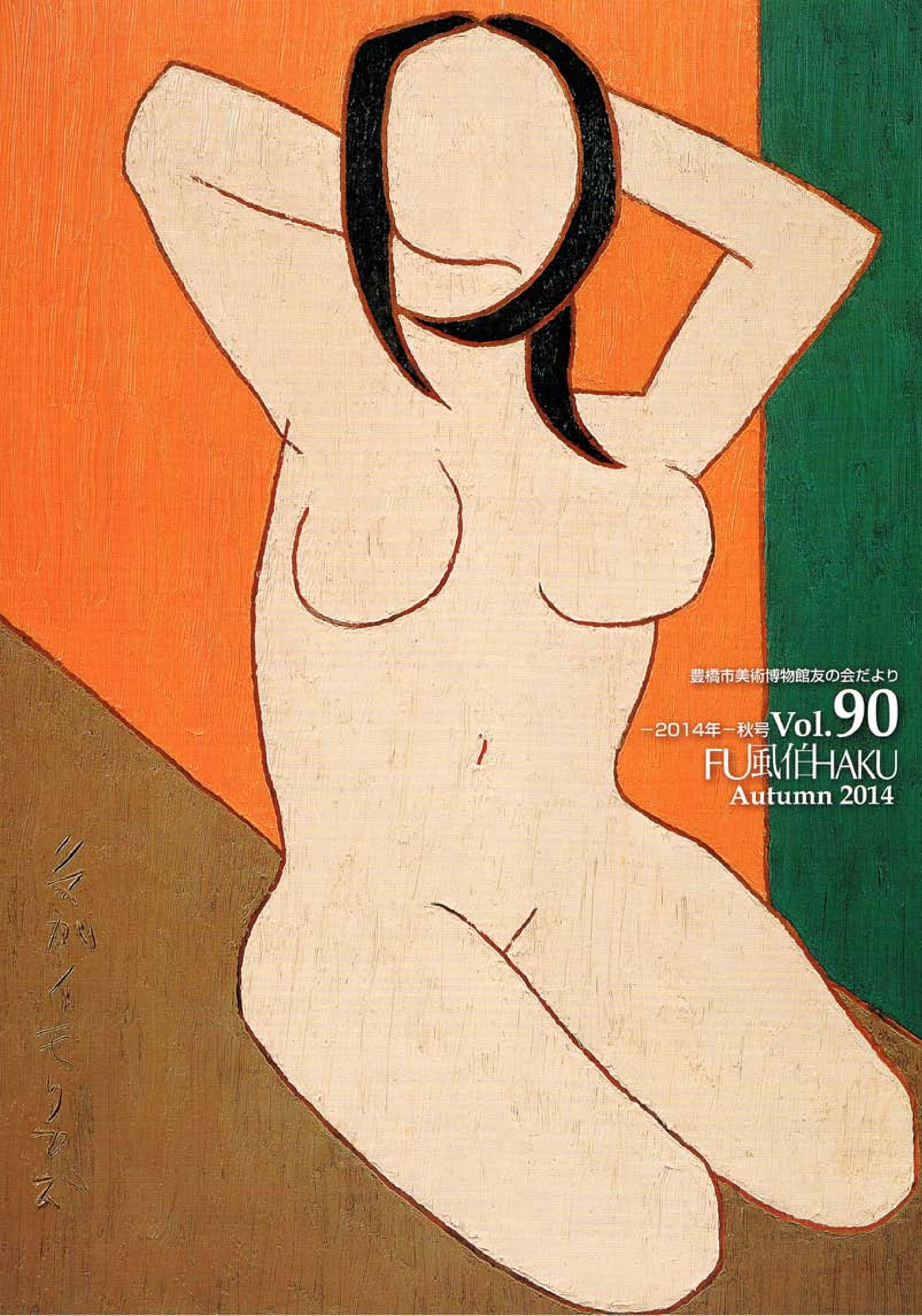


豊橋市美術博物館友の会だより

−2014年−秋号 Vol.90

FU風伯HAKU

Autumn 2014

展覧会紹介

豊橋市美術博物館 開館35周年記念

ウッドワン美術館所蔵 近代日本の絵画名品展

開催中 〜11月24日(休)
月曜日休館（祝・休日は開館し、翌日休館）
豊橋市美術博物館2階展示室

本展では、広島県廿日市市にあるウッドワン美術館の誇る珠玉のコレクションより、日本画37点洋画43点の計80点を一堂に展観します。

高橋由一、浅井忠、竹内栖鳳、上村松園、小倉遊亀、片岡球子…。錚々たる作家による作品群を本誌面において全てご紹介することはとても叶わないので、今回は2点を取り上げます。

●岸田劉生（1891-1929）《毛糸肩掛せる麗子肖像》

当館も、《高須光治君之肖像》（1915年）をはじめとする劉生の所蔵があり、美術資料の核となっていますが、劉生の画業においてひときわ重要な意味を持つ「麗子像」が出陳されることは存外の喜びです。

岸田劉生《毛糸肩掛せる麗子肖像》1920年

1914年4月10日生まれの愛娘・麗子は繰り返し画題となりました。そして、麗子の成長や劉生の画風の変遷に応じ、実に多種多様な麗子像が存在します。みなさんが「麗子像」と聞いてまず思い描くのはどの作品でしょうか。重要文化財の《麗子微笑（青果持テル）》（1921年　東京国立博物館）、寒山拾得と重ねた《野童女》（1922年　神奈川県立近代美術館寄託）などが真っ先に頭に浮かびます。ウッドワン美術館の所蔵する本作品は、重文の麗子と同じ毛糸編みの肩掛けを羽織り、1年先行する1920年、麗子が数え年で7歳の時の作品です。仕上げた日のことを、劉生は日記に綴っています。

「四時頃たうとう麗子仕上げる。まだ描けば描けもしようが、これで筆を擱かうと思ふ。今度は十八日で仕あげた。割に早い。肖像の中ではやはり一番いいものの気がする。しかし、まだまだだ。もつともつと活きた味を出せるつもりだつたのだが残念だ。此次でとりかへしたい。」（『劉生日記一』）※このように、冷静に自らの仕事を振り返っています。数えにして5歳の頃から劉生の絵のモデルをつとめ、父のためにポーズを取る麗子の健気さが伝わってくるかのようです。

●黒田清輝（1866-1924）《木かげ》

2点目は、劉生が1908年に葵橋洋画研究所で学んだ時の師・黒田清輝の作品を紹介します。《木かげ》は、第3回白馬会展に出品するために描かれ、《湖畔》（1897年 東京文化財研究所）、《智・感・情》（1899年 東京国立博物館）他2点と共に1900年のパリ万博に出品されました。逗子滞在中に手がけられた本作では、背負子を枕にして傾斜地に寝そべる田舎娘を描いています。少女はぐみの実をちぎっている一方、そのすぐ傍らには白百合の花が置かれ、黒田が宗教的意味合いを込めてこれらの植物を配置したことが看取できます。外光派表現と合わせ、フランス留学にて学んだ成果を日本の風土・風俗の中で試みた、大変興味深い作品です。

芸術の秋のひとときを、これらの名品と共に美術博物館でお過ごしいただければ幸いです。

（学芸員　細田樹里）

※1920年11月10日の日記。踊り字は繰り返し文字に置き換えた。

公益財団法人ウッドワン美術館 WOODONE MUSEUM OF ART

1996年9月に広島県佐伯郡吉和村（現廿日市市吉和）に開館。吉和は広島県北西部に位置し、面積の94パーセントが山林という、自然に恵まれたリゾート地。同館は、総合木質建材メーカーの株式会社ウッドワンの所蔵する美術品を公開する美術館として、①近代日本絵画②マイセン磁器③アール・ヌーヴォーのガラス作品④中国清代の陶磁器⑤幕末明治期の薩摩焼の5ジャンルの作品を収集・公開しています。

関連イベント

◆記念講演会
「ウッドワンコレクションと近代日本美術」

日時：10月11日(土) 午後1時30分～
講師：重藤嘉代氏（ウッドワン美術館学芸員）
会場：講義室（聴講無料）

◆美術講座
「ウッドワンコレクションにみる日本の美とこころ」

日時：11月9日(日) 午後1時30分～
講師：金原宏行（豊橋市美術博物館館長）
会場：講義室（聴講無料）

黒田清輝《木かげ》1898年

◆学芸員によるギャラリートーク

日時：10月26日(日)、11月1日(土)・13日(木) 午後2時～
会場：展示室（観覧券が必要です）

◆ポイント・トーク「この1点」

国吉康雄《白いシュミーズの女》を中心に解説します。
日時：11月15日(土) 午後2時～
会場：展示室（観覧券が必要です）

ウッドワン美術館所蔵「近代日本の絵画名品展」に期待

藤本逸子(243)

ウッドワン美術館所蔵「近代日本の絵画名品展」に展示される作品の内容をお聞きして、二つ「おおっ！」と驚き嬉しくなり、期待でいっぱいとなりました。

「おおっ！」のその一は極めて単純なもので、「中学の美術の教科書に名前が載っていた画家の作品がいっぱい」というものです。

中学生のころの私は、教科書に出ている名前は、美術にしろ、歴史にしろ、「テストに出る」という目で見ていました。教科書で紹介されている画家の作品の本物を見たり、歴史上の人物その本人に会ったり、ということとは無縁のように思っていました。

そのような思い込みを打ち砕く嬉しい体験を初めてしたのは、40年ほど前、皇居の近くにある東京国立近代美術館に行ったときです。「うわっ！美術の教科書に載っていた作品の本物だ！東京はやっぱり華の都だ！」と、作品を鑑賞するというより、嬉しくて作品の間をキョロキョロ、ウロウロ歩き回っていたことを思い出します。

今、その時と同じような気持ちになっています。身近で、家族一緒に気軽に本物を楽しめる、こんな幸せなことはありません。

「おおっ！」のその二は、私が大学生だったとき、その大学に教授としていらした片岡球子先生の作品も展示されることです。

片岡球子《面構葛飾北斎》1987年

私の大学生時代は、学生運動が激しいころでした。在学中に三島由紀夫の割腹自殺があり、浅間山荘事件がありました。在学した大学でも、教授たちは運動家の学生たちに、度々吊し上げられていました。その中にあって、片岡先生は学生たちに「たまちゃん」と呼ばれて慕われていました。今思うと、そのころのたまちゃんは、今の私と同じくらいのお歳でした。そんなお歳だったのかと、今さらながら驚きます。エネルギーとファイトの塊のような先生でした。先生の作品そのもののような方です。「ファイト満々の懐かしいたまちゃんの絵に会える！」と期待が膨らんでいます。

この拙文の原稿は、9月3日に書いています。『風伯』Vol.90の発行は、10月半ばと聞きました。そのころは、もう「近代日本の絵画名品展」は開催されていますね。「はやく　こいこい　10月11日」、お正月を待つような気持ちで、指折り数えながら10月11日を待っている私です。

展覧会紹介

旅セヨ乙女

開催中　～11月16日（日）月曜日休館
豊橋市二川宿本陣資料館

《東海道五十三次之内　吉田之図》
二川宿本陣資料館蔵

　江戸時代は、街道や宿場が整備されたことにより、男性のみならず、女性にとっても旅が身近になりました。女性が旅をした理由は、大名の国替や父・夫の転勤などに伴う強制的なものもあった一方、湯治や寺社参詣・観光、文芸的な交流など自由なものもありました。また、地域によっては、嫁入り前の娘に伊勢参りなどの寺社参詣を奨励していた所もありました。

　特に江戸時代の後半になると、経済的に余裕のある人々が増えたこと、名所図会や道中記などの旅への興味をかき立てる書籍や刷り物が多く出版されたことにより、娯楽として旅に出る人々が多くなりました。女性の旅は、男性に比べて様々な制約があり、簡単に行けるものではありませんでしたが、「いとまある時は、名所図絵などいふ文くり返して、その所にあそぶのおもひをなせり」（『伊勢まうでのにつき』）と記した中村いとのように、非日常の世界である旅に憧れを持った女性は大勢いたことでしょう。

　旅に出た女性が書き記した旅日記も数多く残されています。彼女たちの旅の記録からは、旅に出た動機、道中で見たものや感じたこと、旅の苦労など、それぞれの興味・関心によって様々な事柄が自身の言葉で記されています。そこからは、江戸時代の女性たちの教養の豊かさ、好奇心の旺盛さを感じることができます。

　今回の企画展では、旅をした女性が記した旅日記や紀行文、女性の旅装束・旅道具、旅する女性の姿が描かれた浮世絵などを展示し、多様な江戸時代の女性の旅を紹介します。（学芸員　久住祐一郎）

女用道中着　近江八幡市立資料館蔵

◆記念講演会「東海道のおんな旅」

日　時：10月25日（土）午後２時～
講　師：柴桂子さん（桂文庫主宰）
定　員：50人（申込み順）
受講料：無料（入館料必要）
申込み：二川宿本陣資料館（0532-41-8580）

編集部からのおすすめ本

　江戸時代、乙女ならぬおばさんも旅していたことがわかる本があります。
　『きよのさんと歩く大江戸道中記』（金森敦子、ちくま文庫）では、鶴岡の商家の妻が日光、江戸、伊勢、京、大坂へと３カ月余りかけて豪華旅行をします。
　『姥ざかり花の旅笠―小田宅子の「東路日記」』（田辺聖子、集英社文庫）では、筑前の商家の妻たち４人が連れだって、伊勢、信濃、日光、江戸、京、大坂へなんと５カ月かけて歌詠み旅行をします。
　どちらも現代文に訳され、わかりやすい解説も付いています。この機会にお手に取ってみてはいかがでしょうか。

小松コレクション「中村正義展」
ー中村正義に魅せられた、ひとりの熱狂的コレクターがいたー

平成26年12月2日（火）～平成27年2月8日（日）
月曜日休館（12月30日～1月3日休館）
豊橋市美術博物館　2階展示室

中村正義《陽》1969年

日展を脱退し、日本画の異端児と称された中村正義には、画風を一転させて画壇の中で孤立した後にも熱心な支援者がいました。自己を貫き通す激しい生き様に共鳴し、その過激な作風に魅了されたコレクターは複数いますが、なかでもいわき市の故・小松三郎氏は、秀逸なコレクションを築いたばかりでなく、正義作品を中心とする「いわき近代美術館」（現在は閉館）を昭和58年に開設するなど、正義没後もその画業を世に残そうと尽力しました。画家とコレクターの出会いは正義の没する４年前、病と闘いながらも从会や東京展を発足し、残されたわずかな時間を燃焼するかのように奔走した時期にあたります。そのため、晩期の代表作《おそれA》《おそれB》《うしろの人》や絶筆《屈然》がコレクションの核となりましたが、そのほかにも自画像や顔シリーズ、裸婦、仏画、薔薇、水墨画、墨書など、収集内容は多岐にわたっています。このたびの展覧会は小松氏ご遺族のご協力により、56点の中村正義作品をまとめて紹介するはじめての機会となります。現在は豊橋市美術博物館が所蔵している《おそれA》《おそれB》《舞妓》《うしろの人》もあわせて展示し、一人のコレクターの目を通してとらえた中村正義の魅力に迫ります。

（学芸員　丸地加奈子）

◆記念講演会「中村正義の魔力」
日時：12月６日（土）午後２時～
講師：大野俊治（豊橋市民文化会館館長）
場所：美術博物館１階講義室

◆土曜サロン「対談：田島征三（画家）× 中村倫子（中村正義の美術館館長）」
日時：12月13日（土）午後２時～
進行：大野俊治（豊橋市民文化会館館長）
場所：美術博物館１階講義室（要申込51-2882）

◆ボランティア・ガイド
日時：12月９日～28日、１月４日～２月８日
（土曜日を除く毎日）午後１時30分～、
午後２時30分～

◆映画上映「父をめぐる旅」
日時：毎週土曜日（ただし、12月６日、13日はのぞく）午後２時～
場所：美術博物館２階ラウンジ

午年から未年
干支と新春の遊び展

平成26年11月29日（土）～平成27年1月18日（日）
月曜日休館（1月12日は開館し、12月30日～1月1日・13日は休館）豊橋市二川宿本陣資料館

五十三駅東海道富士見雙六（すごろく）

かつて唱歌にも歌われた子どもたちに人気の正月遊びといえば、凧揚げ、独楽回し、まりつき、羽根つき。さらにカルタとりや双六も人気がありました。

ところが最近では、外で凧揚げや独楽回しができる場所が少なくなり、また、テレビゲームの普及などから子どもたちが外で遊ばなくなり、これら正月の風物詩を目にする機会も少なくなりました。

この展覧会では、豊橋市美術博物館所蔵の大口コレクションなどから郷土玩具を、あわせて当館所蔵の双六などを展示し、干支や季節にちなんだ郷土玩具と新春の遊びについて紹介します。

（主任学芸員　高橋洋充）

寄稿

先月、6回目を終えた「トリエンナーレ豊橋　星野眞吾賞展」。今回は全国から264点の応募があり、その中から50点が入選し、星野眞吾賞（大賞）には漆原夏樹さん（神奈川県藤沢市・36歳）の《彼女の風景》、準大賞には高村総二郎さん（兵庫県尼崎市・49歳）の《0306》、優秀賞には川島優さん（愛知県長久手市・25歳）の《Inside》が選ばれました。愛知県からは38点の出品があり、そのうち6点が入選しました。このたび、豊橋市から唯一の入選を果たした鈴木敬三さんに、展覧会への想いを寄稿していただきました。

星野眞吾賞展に入選して

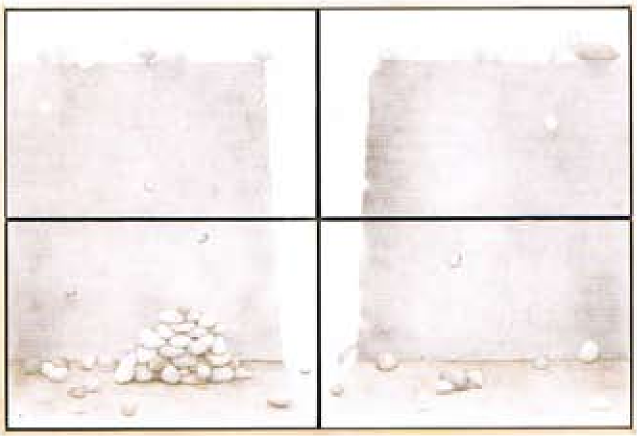
鈴木敬三（日本画家）

子供の頃から、星野先生の主宰する美術教室に通っていた私は、受験のデッサンも先生に習い、美大へ進学した。大学に入学後も夏休みなどで帰省した際は、先生の所へよく遊びに行った。普段寡黙な先生が、お酒が入ると饒舌（じょうぜつ）になり、学生の私に芸術論を語ってくれた。いつも言われていたことが、「絵には思想がなければいけない。」という言葉だった。その後30年以上絵を描き続けてきたが、いつも先生の言葉を心に刻み、制作に取り組んできた。

星野眞吾賞展は、先生の想いを更に拡げていく場でもあると思う。先生の想い以上の作品は、なかなかできないが、描き挑戦し続けることが、先生への恩返しであり、先生に認めて頂ける唯一の方法だと思っている。

そんな思いで、毎回出品しているのだが、この年齢になると、落選の可能性のあるコンクールに挑戦するのは、かなりの覚悟がいる。もちろん出品するからには、大賞を目指すし、それなりの自信作を出品するが、革新的なものが描けているか？先生の意に沿うものになっているのか？落選したら……と、弱気になることもある。失敗すること（落選は失敗ではないが）を恐れ、挑戦することから逃げてはいけないし、挑戦することこそ革新的であることだと、自分に言い聞かせ、覚悟を決め出品してきた。

今回の入賞、入選作に関して、批評できる立場ではないが、若い作家たちの作品は、構成力もデッサン力も技術も既に老練な作家のようで、その完成度の高さには驚かされた。



第６回展入選／鈴木敬三《それぞれの場８》

しかし、星野先生や、先生の同志であったパンリアルや从会の創立メンバーたちは、完成度など求めて描いていたのだろうか？彼らの作品からは、社会に対する不満、自分たちの未熟さに対する嘆き、作品から叫びが聞こえてくるようだ。もちろん時代も違うし、戦争も貧しさも知らない若い世代に、そんなことを要求することはできないが、きれいに仕上がった作品ばかりを見ていると、自分の作品も含め、不満に思えてしまった。

絵画・芸術は、時代や社会によって求められるものが違う。今の時代が求めているものが評価されるのは当然ではあるが、星野眞吾賞展は、時代や社会に沿わなくても、時代や社会に媚びない、革新的な異端や前衛的なものを評価しても、いいのではないだろうか。

技術を持っているだけでは、描き続けることはできないが、技術はなくとも、想いがあれば、描くことは続けられる。何を描くか、どんな想いを込めるかが大事なのだと思う。

すずき・けいぞう／1959年愛知県宝飯郡小坂井町（現豊川市）生まれ。1982年大阪芸術大学美術学科膠彩画ゼミ卒業。2000年「現代・墨への挑戦2000」準大賞。2001年「墨画トリエンナーレ富山」最優秀賞。第59回「パンリアル展」以降毎年出品。2002年「三遠南信アート展」出品（06年・10年も出品）、2007年「東三河の美術～郷土ゆかりの作家たち」出品、2009年「墨の位相―現代水墨画特別展」出品。2008年「第4回トリエンナーレ豊橋　星野眞吾賞展～明日の日本画を求めて～」入選、第5回展（2011年）、第6回展（2014年）にも入選。現在、パンリアル美術協会会員。アートスクール「くれよん」主宰。豊橋市在住。

友の会土曜サロン「日本画の革新—星野眞吾と高畑郁子を中心に—」に参加して

神野志保子（507）

星野眞吾賞展に併せて、星野夫人である高畑郁子さんと、前・豊橋市美術博物館主任学芸員で从会会員の大野俊治さんによる対談が開催された。

最初に大野さんが、日本画にこだわり続けた星野眞吾の信条を紹介。続いて、作品画像を映写しながら、初期のシュールレアリスム的作品に始まり、斬新で革新的な表現を模索する中、父の死による喪失感から初めて人拓を試みた《喪中の作品・昇天》《喪中の作品・白》、さらに人拓と透明なビニールを組み合わせた作品群へと進化を遂げていく過程を、主に技法について解説してくださる。

あいまに高畑さんが鋭い突っ込みを入れるなど、長年の知己ならではの和やかな対談に、40人余の来場者から笑い声も。

抽象的に見える人拓がリアルで、リアルに見えるビニールが描写によるもの。石油製品であるビニールは現代文明を象徴、など目からウロコの連続だった。

最後は、インド旅行で大きく開花した高畑さんの作品群を映写。最近は郷土の祭りを題材に描いていることなどが紹介された。

なにより、「星野は売り絵に流れず、信念をもって時代をとらえる革新的な仕事をした。全国の国公立美術館に収蔵されている。星野と中村正義の絵は後世まで残る」という、高畑さんの誇りと尊敬のこもった言葉が心に残り、星野眞吾賞の意義をあらためて感じた一日だった。

安野光雅ワールドの魅力 ～「安野光雅『旅の絵本』の世界展」に寄せて～

河邉満江（201）

私が安野光雅の昔からのファンだと言うと、大方の反応は「ああ、面白い本を描く人ね！」というものである。もちろんそうに違いないが、それだけではないことをこの際、是非皆に知ってもらいたい。

安野光雅について書くことが決まった日、なんだかとてもウキウキしてきて寝付かれず、書斎に並ぶ「安野光雅」のコーナーの前に立った。およそ５～60冊はあるだろうか、比較的最近発行された『絵のある自伝』を手に取ってみる。パラパラとページを繰っていると、かつて読んだ懐かしい本のことなどがいっぱい目に飛び込んでくる。

あれも面白かった、これも楽しかった、と手当たり次第に棚に手を伸ばす。このところ、年齢のせいか、一日が終わるとぐったりと疲れがでて、早々と就寝することが多くなってきたのだが、この日ばかりは書斎にこもったまま、しかも立ったまま日付はいつしか翌日に変わっていた。

私の感じている安野光雅という人は、とんでもない超人というか、大きな人である。彼の知的好奇心の旺盛さは、あらゆるジャンルにわたり、独創的なものの見方、とてつもない想像力、ユーモアたっぷりの表現力、数理的な感性、読書量の豊富さ、それらすべてのものが沢山の著作にあふれていて、読む者を飽きさせない。

エッセイや対談が無類に面白く、一時、彼の全著作を読破したいと思い、随分と買い集めたが、あまりにも次から次へと矢継ぎ早にあふれるように出版されるので、そのうちお手上げになってしまい、諦めざるを得なくなってしまった。仕方がないので目に付いた本だけを辛うじて購入するようになった。

今一番気に入っているのは『繪本（えほん）　即興詩人』（安野光雅画・文、アンデルセン原作、森鴎外訳、講談社、2002年）である。この絵本を描くために彼はイタリア中を歩いたという。絵と文章からなる各ページに、鴎外の原文から多く引用し、美しいひびきを持つ漢語がちりばめられている。それこそ声に出して読みたい文語文だ。

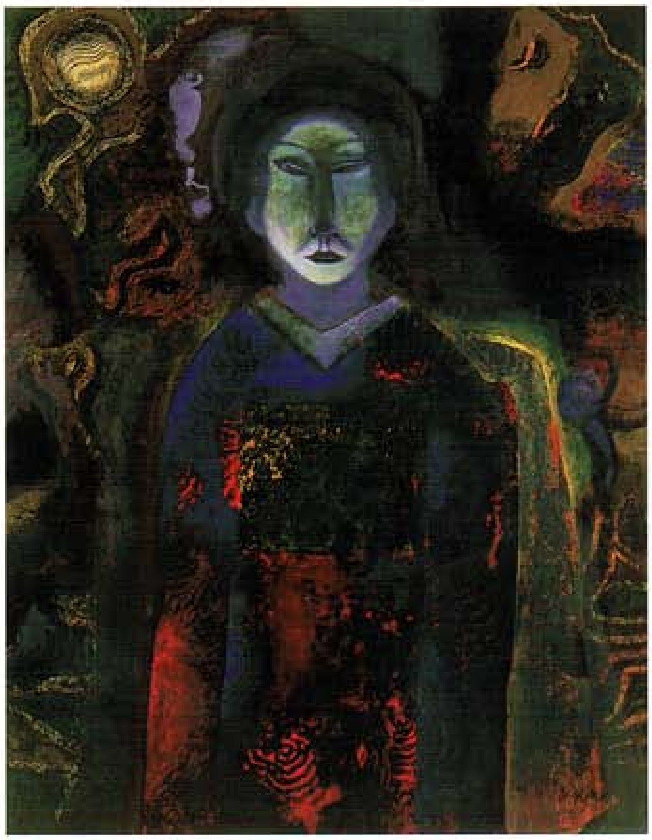
ちなみに2010年11月、安野光雅口語訳のずっしりと重い『即興詩人』が山川出版社から発行された。長年かかって訳された読み応えのある本である。

収蔵品紹介

舞妓

中村正義●NAKAMURA Masayoshi

昭和51年(1976)　紙本着彩　116.7×90.9cm　平成6年度購入



これまで幾度か『風伯』誌上を中村正義の描く舞妓が飾りました。紅白のコントラストが鮮烈な中期の《舞妓》(66号掲載)と、最晩年の代表作《うしろの人》(78号掲載)は、ご記憶の方も多いでしょう。実際のところ、中村正義の画業に占める舞妓の役割は大きく、初期の日本美の体現としての舞妓から、真逆の解釈による中期以降の舞妓まで、多様なバリエーションを生みだしました。伝統的日本美をかなぐり捨てた正義が終始舞妓に固執したのは、白粉と金襴で塗り込めた虚飾の外面と、内側に潜む生身の女という2面性にもよるのでしょう。さらに、そうした舞妓たちの構図には影のように寄り添う「うしろの人」が多々みられます。それは男の姿であったり、もうひとりの舞妓であったり、何者か定かでない人影などさまざまですが、この《舞妓》では、面長の容貌から作者・正義の存在を彷彿(ほうふつ)させます。中期の「男と女」シリーズのようなコミカルでエネルギッシュな関係はすでになく、死出の道行きのように幽明が相交わる印象です。正義はこの作品を描いた翌年52歳で病没しますが、闘病生活の果てに見出したのは、生死を越えた男女の業(ごう)であったのかもしれません。背後に渦巻く文様には左上に円、右上に三日月のような形象が描かれ、先述の虚と実に加えて、日月、陽陰、男女といった対比が見出されます(しかし、月のような右上の形は、もうひとりの人物の目である可能性も…?)。

この作品は、いわき市のコレクター故・小松三郎氏が所有していたものです。同氏は晩年の中村正義と親交があり、その人間性と作品に傾倒して収集を始め、個人美術館を開設したほどの人物です。当館が所蔵する正義の晩年の代表作《おそれA》《おそれB》《うしろの人》もコレクションに含まれていました。このたび開催する同氏のコレクションによる「中村正義展」(詳細は5頁)に、この《舞妓》をふくめた晩期の代表作を出品いたしますので、ぜひご覧ください。

(豊橋市美術博物館学芸員　丸地加奈子)

編集後記

今まで知らなかった画家の、大好きと思える魅力的な作品に出合った時、ワクワクし何とも幸せな新鮮な喜びを感じます。

先に開催された「トリエンナーレ豊橋　星野眞吾賞展」はそんなワクワク、ドキドキ感に溢れていました。

〈明日の日本画を求めて〉という副題にそって、しかも〈従来の概念にとらわれない日本画〉という選考基準の中で選ばれた作品たち。審査員の方が講評の中で「審査員が審査されている気がする」と言われた言葉が印象的で、権威に寄りかからず純粋な緊張感の中での作品選考が、若い人たちの応募の多さに繋がっているように思われます。5人の審査員推奨の作品もそれぞれ趣が異なり魅力的でした。

今回6回目の星野眞吾賞展が、今後更に充実した内容で大きな存在になっていくであろう予感と期待を抱かせてくれました。

3年後はどんな作品に出会わせてもらえるのかとても楽しみです。

(鈴木冷子)

【表紙作品】
熊谷守一《裸婦》(部分) 1963 (昭和38) 年　ウッドワン美術館蔵
＊開館35周年記念 ウッドワン美術館所蔵
「近代日本の絵画名品展」(～11/24) にて公開中

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第90号

編集・発行　豊橋市美術博物館友の会
会　　長　宮田正人
編 集 長　高須博久(副会長)
編集部長　望月志郎
編集委員　鈴木冷子　神野志保子　河邉満江　藤本逸子　清水貴裕
協　　力　豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1　TEL.0532-51-2882
平成26年10月15日発行